

第3章 南アフリカ共和国観光部門の課題

3 - 1 観光関連行政 / 組織 / 振興

観光行政は、単に観光市場の開発、観光宣伝ばかりではなく、宿泊施設等の観光施設の整備や旅行業者の育成・指導・監督、ツアーオペレーター・観光ガイドの養成はもとより、旅行者の安全確保のための治安維持対策、伝染病予防等の保健医療、生活衛生対策といった広範な分野についても観光振興の見地から調整・協力していくことが重要である。

このためには、現在の環境観光省の観光局の人員体制ではあまりにも少人数であり（定員15名、秘書・文書担当を除いた行政官は7名といわれている）、本格調査が開始された際にはカウンターパート（C/P）機関としての対応と南アフリカ政府内の総合調整機関として対応してもらうためには限界があるため、早急な組織体制の整備が望まれる。

また、観光産業における人材育成は緊急な課題といえる。特にこれまで基本的な職業教育の機会に恵まれなかった階層の就職機会の増大のために、観光産業における人材養成計画の策定とその計画達成のための具体的な養成施設の整備、教育訓練者の養成が急がれる。

環境観光省は、1997年にスペインの協力を得て南アフリカ観光研究所の設立に関する調査を実施し、調査報告書を1999年年頭に環境観光副大臣に提出した。この報告書によれば同研究所は、観光及びホスピタリティー産業分野における高等技能教育、黒人社会のための観光技能訓練を中心に観光省の付属機関として全国の観光職業訓練の中心的役割をなすものであり、3か年計画で総額1,458万4,000ランド（約2億9,168万円）必要とされている。

しかしながら、この報告書は概念論が中心であり、具体性に欠けているためフィージブルであるかどうかは分からない状況であり、本格調査におけるレビュー及びより深い考察が必要である。

3 - 2 観光資源及び観光商品

南アフリカの観光全般は、個別観光地それぞれの質が高く、部分的には我が国を上回る内容のところもある。また、観光を支える情報提供などひとつをとっても、先進国と遜色のないレベルにある。このようなことから、いわゆる発展途上国のように多くの課題を抱えるという状況にはないと判断される。

そのなかで、現地調査の結果も踏まえて課題を列記すると、次のようなことがいえる。

【考えられる課題】

南アフリカに限ったことではないが、全国的な観光を考える場合には、広域流動として南アフリカの代表的な資源を駆け足でみる観光と、滞在しながらじっくりと興味対象の観光を楽しむ2タイプの旅行形態で考える必要がある。この2タイプについて、課題を述べれば以下のような

る。

- 広域流動観光に対応して：現在、海外からの広域的な観光に対しては、南アフリカではケープ・タウンの“一人勝ち”の状況にある。国際観光という観点からは、観光市場でも述べたとおり、ビクトリア滝とケープ・タウンが必須の訪問地となっている。遠方よりアフリカを訪れる観光客の場合、いわゆるサファリ体験が重要な魅力となる。現在、南部アフリカではチョベ国立公園（ボツワナ）がこの役割を担っているが、南アフリカ国内においてチョベに替わる手軽で効率的な探訪のできるサファリ体験の場を提供できれば、国際観光に対する厚みが増すと思われる。
- 滞在型観光に対応して：南アフリカは、動物、野鳥、植物などの資源に恵まれている。一方、これらを探勝するツアーは、それぞれの国立公園などで行われているものの、まだツアー商品を開発する余地は十分にあると考えられる。このため、S I T（Special Interest Tour）やエコツーリズムといった視点から、更にツアー商品開発を進め、滞在促進や観光目的の多様化に努めることが必要と考えられる。

南アフリカは、広大な国土ということもあり、観光資源の分布が点として存在し、連続していない嫌いがある。ウエスタン・ケープ州における「ガーデン・ルート」やノーザン・プロビンスにおける「アイボリー・ルート」のような取り組みもあるものの、国全体からみれば更に広域観光ルートづくりを進める余地は十分にあると判断される。南アフリカ観光の魅力を高める意味から、必要な取り組みと思われる。

また、同国の観光資源の特色として、文化や民族に関する観光資源（施設）に乏しいことが指摘できる。このようなことから、国を代表する内容の民族村といった観光施設を整備することも課題のひとつといえよう。

（１）代表的な観光資源／商品の現状と課題

事前調査期間中に現地踏査を行ったケープ・タウン、ダーバン、クルーガー国立公園、キンバリー及びサン・シティの結果をまとめると以下のとおりである。

１） ケープ・タウン（Cape Town）

【現 状】

観光的な都市の魅力としては、港町として同様の資質をもつサンフランシスコ、バンクーバー、リオデジャネイロなどの都市と比較しても遜色はない。国際級の資源性をもつと判断される。

また、都市に隣接して若しくは日帰り圏に、喜望峰、テーブル・マウンテン、ワイン

ルートなどの様々な観光的な見所を有し、当地の魅力を高めている。

さらに、同都市は各種人種・宗教を内包し、コスモポリタンの雰囲気も観光に深みを与えている。

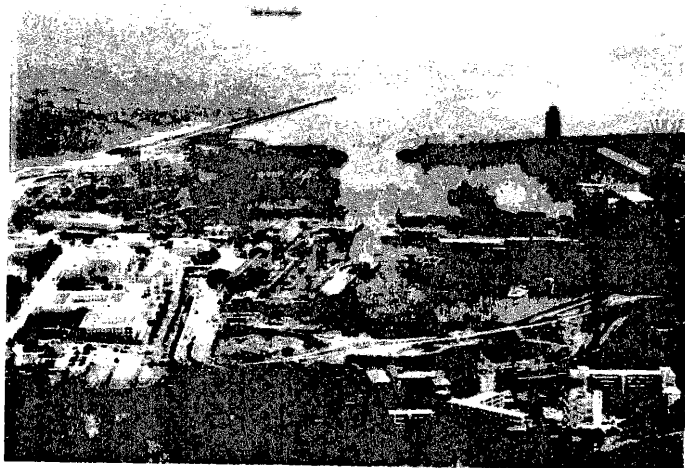
ホテルについても、S A T O U Rの与える最高のランキングであるシルバー・コレクションに、全国15宿泊施設中ケープ・タウン内の5施設が選ばれており、また、ショッピングセンター、レストラン、水族館などの見どころとも量・バラエティーにおいて高いレベルにあり、申し分のない内容となっている。

【課 題】

施設についての物的な面では、先進国の一流観光地と同等の水準にあり、これらについては課題はほとんど見いだせない。

当地においては、先のとおり宿泊施設は充実しているものの、年間平均の室稼働率は66.65%（1996年）と必ずしも高い数値とはなっていない。このため、新たな施設づくりよりは、いかに観光客を呼ぶかが課題となっており、この意味では、潜在力の大きい日本・東アジアを含む誘客対策や受入方策（発地でのプロモーション・宣伝、着地での各種言語ガイド・パンフ類の充実など）を進める意義は大きい。

■ ケープ・タウン及び周辺 ■



ケープ・タウンのウォーター・フロント地区は、ホテル、ショッピングセンター、水族館などの施設が整備され、同地の観光的中心となっている。



ケープ・タウンの日帰り圏には、ワインランドがあり観光やピクニックの場として利用されている。個々のワイナリーもこぎれいに出来ており、質が高い。



喜望峰は、世界的に著名な場所であるが、全体の雰囲気をもたずことなく歩道と簡単な看板のみの整備に抑えられている。



ケープ・タウン市内のイスラム教徒街。様々な文化・民族の混在するコスモポリタンの雰囲気が当地の魅力のひとつとなっている。



アフリカペンギンのコロニー。ケープ・タウンより喜望峰に至る観光ルートには、このような見どころもあり、観光客を飽きさせない。



喜望峰のギフトショップ・休憩舎。屋根上に緑化を施し景観・環境対策を行うなど、質の高い施設を提供している。

2) ダーバン (Durban)

【現 況】

ビーチを売り物とする国内最大の都市リゾートである。しかし、資源性の国際的な比較を行うと、同質のゴールドコーストやハワイなどと比べて見劣りがし、Aクラスにはなり得ないと判断される。ビーチ自体の延長は十分にあるが、多くの観光客の憧れる白い砂（いわゆるサンゴ礁の砂）ではなく、この要因がマイナスに働いている。

また、海岸沿いのホテル、施設群（ビーチ沿いの遊園地など）は、1950～1960年代のマイアミなどを彷彿させるやや古めかしいデザインの施設であり、近代的ではあっても楽しさに欠けている。海外から、このビーチだけで客を呼ぼうとする場合、東南アジア、インド洋、地中海には多くの魅力的なビーチ・リゾートがあるだけに、競争力は極めて弱いと判断される。

さらに、都市内には植物園や同国最古のヒンズー寺院などがあるものの、周辺日帰り圏を含めて国際観光に対応した魅力的な観光資源・施設には恵まれていない。今回訪れたシャカランドもそれなりの楽しみは提供してくれるが、観光を目的として訪れるには魅力に比して距離が遠すぎ、また途中に見どころもなくダーバンからの間延び感は否めない。

当市は、コンベンションの誘致には熱心であり、2000年には世界エイズ会議を開催した。コンベンションの運営には相応のノウハウをもっていると思われるが、参加者の妻帯者等が会議中や会議後に訪れる観光資源は、上記のとおり少ないと判断される。

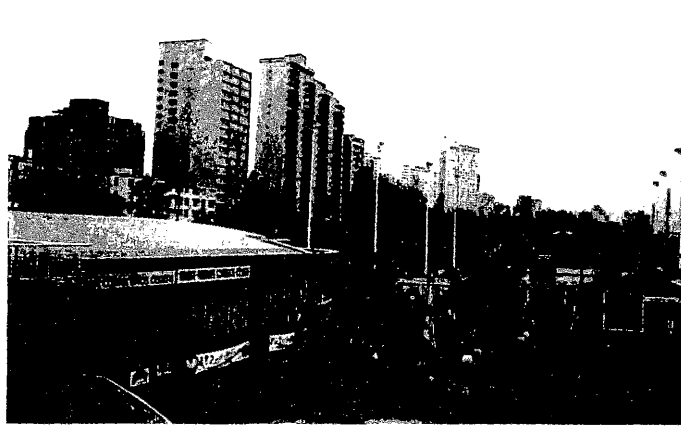
【課 題】

都市の観光的な魅力とコンベンション促進を目的として、都市内での見どころ、ショッピング街等の開発、さらには、これらを結んだ歩行観光ルートの開発などを行う必要がある。

ダーバンを含む地域全体での観光的魅力を高めるため、既存シャカランドを組み込んだ、都市周辺部での日帰り周遊観光ルートづくりを進める必要がある（先にも示したとおり、現在のシャカランドとダーバンとの距離では間延び感があり、中間部に更に見どころが欲しい）。

以上の内容からみて、ダーバンでは施設や観光ルート開発など、ハード・ソフト両面にわたって改善・提言を行う余地はあると考えられる。

■ ダーバン及び周辺 ■



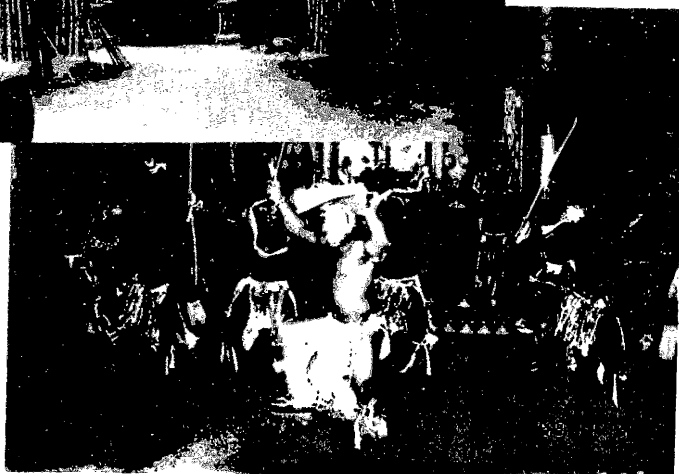
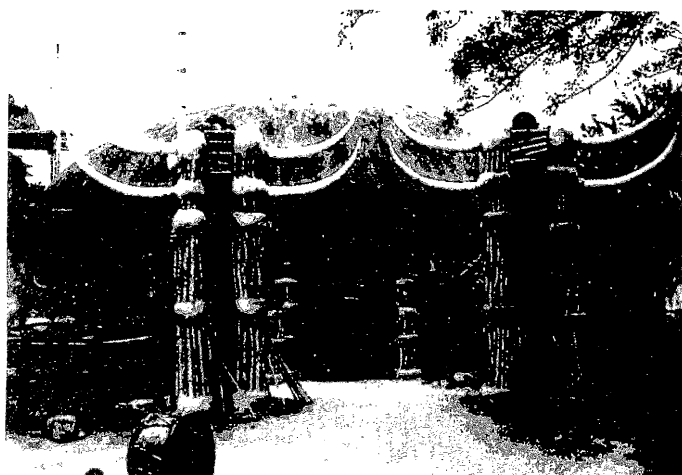
ビーチ沿いのホテルを含む観光諸施設は、近代的ではあっても遊び心に欠け、現在の施設デザインと比較すると、やや無味乾燥な印象を受ける。



郊外のビーチは、こじんまりとしており、ゆったりとした滞在を楽しめる環境を備えている。



ズールーランドに至る道沿いの景観は、サトウキビ畑が延々と続き単調である。



ダーバンから日帰り圏にあるシャカランドは、ズールー族の民族文化を手軽に楽しめる施設ではあるが、同市から距離のあることに比して、ルート上にこれといった見どころのないことなど、到着するまでの観光的な工夫がない。

3) クルーガー国立公園 (Kruger National Park)

【現 況】

四国とほぼ同じ面積をもち、広大ではあるが茫洋としており、動物探勝のポイントが絞りにくい難点がある。また、全体の景観も一般的に日本人のイメージするサバンナ (ケニアのような) のそれではなく、喬木の散在した森に近いものであり、アフリカ気分の味わいにくい内容となっている。

また、動物の見せ方も、ここに行けば必ず見られるといった工夫 (水場を作るなど) もあまり積極的には行っていないようで、単調な景観のなかを車で走り回り “ 出会い ” を待つといった形態が主体となっている。この見せ方は自然公園としてひとつの見識ではあるが、忙しい日程のなかで行動するツアー客には、不満を残しやすいともいえ、評価は旅行者の立場により異なると考えられる。

ただ、園内の宿泊施設は質が高い。調査団の宿泊したモパニ (Mopani) では、バス付きのコテージ群に加えてスーパーマーケットやレストランも付帯し、快適な滞在が行える便益が整っている。他の宿泊施設についても、見た限りでは遜色がない。また周辺の民間ゲーム・リザーブでは、国際級の施設レベル・サービスを提供し、いわゆるプティック・リゾートとして大人が贅沢な時間を過ごせる施設もあり、宿泊施設に厚みを加えている。

結論として、短時間に主な観光地を駆け足で周遊するツアー客 (日本人観光客のように) にはやや不向きであり、特別の興味をもち、十分な滞在時間と費用をさける観光者の滞在地と判断される。

【課 題】

もし、駆け足で巡るツアー客に効率的に動物探勝を楽しんでもらおうとすれば、何らかの見せるための物理的な工夫 (ハード面) 若しくは動物がどこにいるかのシステムチックな情報提供 (ソフト面) などの対応が更に必要と思われる。

敷地が広大なだけに、どこに置くかの議論はあろうが、公園全体を統括するようなビジターセンターの整備も考えられる。また、このビジターセンターを単に公園紹介施設にとどめず、広大なフィールドを生かした自然ガイド養成所、環境研究所、傷ついた動物の保護センターなどの複合施設として発展させ、隣接国を含めた環境総合センターとして育成することも考えられる。

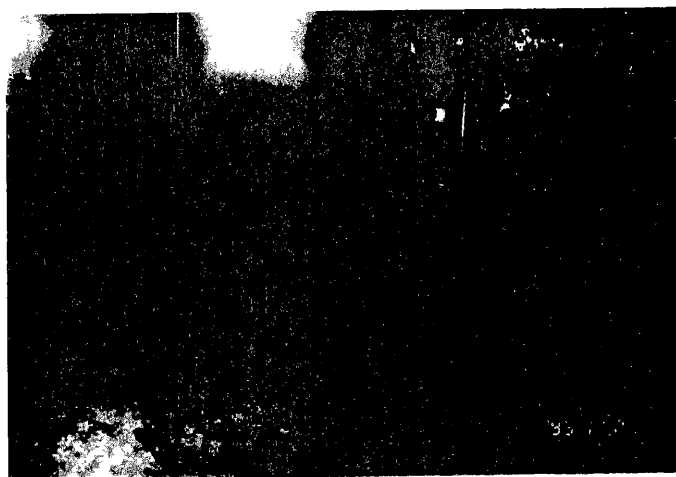
■ クルーガー国立公園 ■



公園内は、まばらな喬木が主体であり、我々がイメージするいわゆるサバンナとは、やや趣を異にする景観を呈している。



コテージの集合したキャンプ内には、スーパーマーケットなどが用意され日常雑貨、食料品、スーベニアなどが購入できる。



公園内コテージの内部。贅沢ではないが、必要なものは装備されており、全体に清潔でよく管理が行き届いている。



同公園のゲートの1つであるパラポーワ。地場の意匠と素材が使用されており、品よくまとめられている。



公園に隣接した民間ゲーム・リザーブ施設。アフリカを感じさせるデザインと高いサービス水準により、贅沢な時間を過ごすことができる。



4) キンバリー (Kimberley)

【現 況】

砂漠的な気候、ダイヤモンド採掘跡のビッグ・ホール、市街地中心部を走るトリムなどが観光資源である。しかし、総体としては観光資源に乏しく半日滞在で十分な内容で、現況では諸外国から客を呼べる魅力には乏しい。

同地の呼び物の1つであるビッグ・ホールにしても、周縁から金網越しに垣間見るといった見せ方であり、いまひとつの感は否めない。実現性はともかくとして、例えばホール両端を吊り橋でつなぎ、その深さと大きさを実感してもらうなどの工夫があってもよい。

また、ダイヤモンドの町にしては、ダイヤモンドそのものが観光資源として際だって見えてこないのも魅力を減じている。防犯上の問題はあるが、採掘や収集・選別などの現場を産業観光として捉えて、観光資源として磨きをかけることも考えられる。

キンバリーの属するノーザン・ケープ州は、特異な野生植物の宝庫として有名なナマクワランドなどを有し、SITやエコツーリズムの対象としては、有力な候補地となろう。

【課 題】

キンバリーの観光的な魅力を高めるためには、前にもふれたとおり、観光資源の見せ方の工夫、さらにはダイヤモンドの産業観光化への取り組み、主要な見どころを一筆書きで巡れる観光ルートの開発など、基礎的な対応が必要と思われる。

また、州全体としては、資源性からみてSITやエコツーリズム展開の可能性は高く、また面談した行政担当者の印象では、観光開発に熱心であることから、これら促進に協力することは歓迎されると判断される。

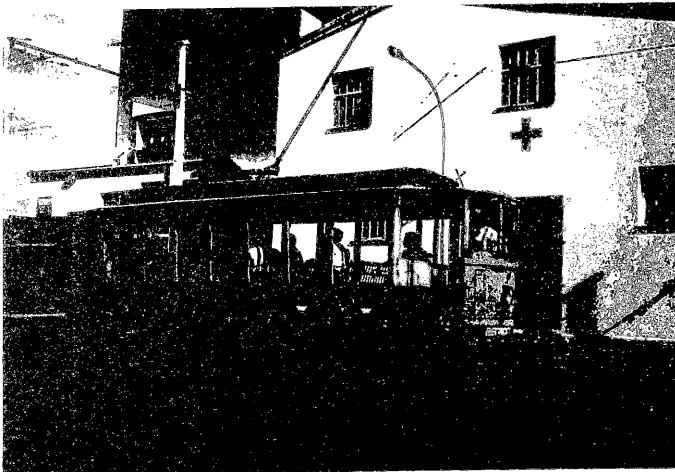
■ キンバリー ■



同地の代表的な観光資源であるビッグ・ホール。人力による穴では世界最大といわれる。観光資源としての見せ方に工夫がなく、資源性を生かしきれていない。



ビッグ・ホールに隣接した鉱山博物館。当時の町並みが再現されている。施設密度、展示方法については、ひと工夫が必要である。



市内を走るトリム。観光資源の1つであるが、ループ状でなく、同じ地点を往復するため、魅力を半減している。



旧市街の景観。観光的にショッピングセンターなどとして再生することも可能と思われるが、今のところ特別な利用はなされていない。



市内にあるウィリアム・ハンフリー美術館。南アフリカ有数のコレクション（フランドル派絵画など）を持つといわれるが、先進国の同類施設と比べると見劣りすることは否めない。

5) サン・シティ (Sun City)

【現 況】

半砂漠地帯に人工的に作られたラスベガス・スタイルのリゾートである。施設内容は、最高級のザ・パレスをはじめとする4軒のホテル、人工波プール、カジノや映画館等からなるアミューズメント・センター、ゴルフ場(2コース)、テニスコート、湖、ヘリポートなどからなる。

施設全体のつくりは、豪華さと奇抜さを売り物にしたものであり、それなりに楽しむことができる。しかし、本場ラスベガス、ディズニーランドやユニバーサルスタジオなどの本格的なテーマパークと比較すれば、その魅力は相対的に低く、南アフリカ国内客や国際観光客でもツアーの立ち寄り・1泊がせいぜいと判断される。

また、当地はヨハネスブルグから北西に130kmの位置にあり、同地やプレトリアからの日帰り観光も可能である。このため、施設配置上は一応の区分はあるものの、日帰り客と宿泊客の施設が同一敷地内に混在しており、宿泊客に対して静かで落ち着いた雰囲気を提供できていないのも、リゾートとしてはマイナスである。

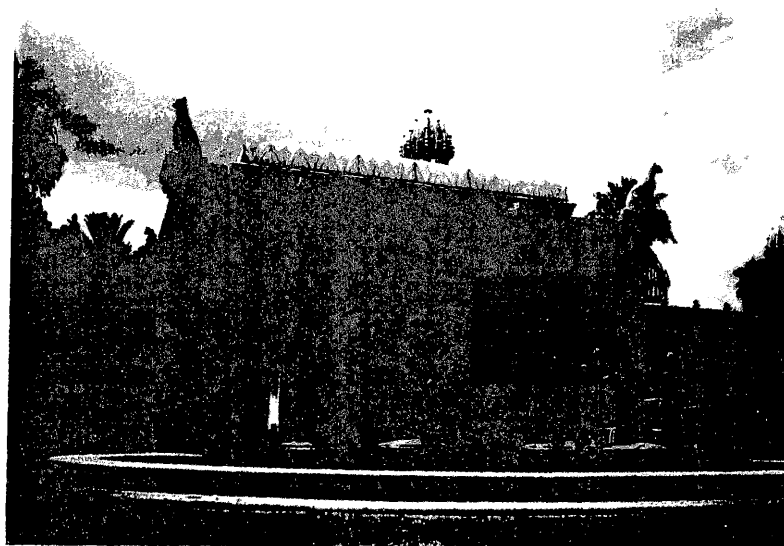
当サン・シティに隣接しては、ピラネスバーグ国立公園(Pilanesberg N.P.)があり、サファリ体験を楽しめるが、元は農場であり、ほとんどの動物を他より移入した歴史があるだけに、やや動物層の薄さや野性味に欠ける印象を受ける。ただ、ヨハネスブルグ等からの日帰り圏に位置するため、手軽なサファリ体験の場としての存在価値は十分にある。

【課 題】

サン・シティそのものについては、国際観光での競争力を高めるためには施設の拡充などの対応を行う必要がある。ただし、利用者を国内客中心に若干の海外旅行者と考えているのであれば、現況でも特に問題はない。いずれにしても、当施設は民間の設置・運営によるものであり、今後の展開は、運営会社に委ねるしかない。

ピラネスバーグ国立公園については、クルーガーと同様に広大な敷地を単調に走るといった内容であり、動物の見せ方については、あまり工夫がない。このため、自然な形でどのように動物を見せるかが課題の1つといえる。なお、当公園においても、宿泊施設の質は高く、特に課題は見いだせない。

■ サン・シティ ■



同地の最高級ホテルであるザ・パレス。奇抜さと豪華さを売り物としている。



敷地の一部はロスト・シティというコンセプトでまとめられており、映画インディー・ジョーンズを感じさせる異空間を提供しているが、“驚き”を感じさせるまでの演出には至っていない。



駐車場と中心施設とはトリムで結ばれており、終点駅にはウエルカム・センターが付設されている。



場内には、造波プールもあり、地元のレクリエーション客などに利用されている。



カジノのあるエンターテインメント・センターの玄関口。施設の性格上、派手な装飾が施されている。